様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００５７４

研究課題名（和文）生成文法の枠組みにおける量化に関する方言研究

研究課題名（英文）A Generative Approach to Quantification in Japanese Dialects

研究代表者
宮本　陽一（Miyamoto, Yoichi）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・教授

研究者番号：５０３０１２７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は、近年の実験語用論の分野における理論的な発展を踏まえ、日本語の論理接続詞の統語的ならびに意味的な振る舞いを明らかにすることを目的とした。特に日本語の選言接続詞「か」に焦点を当て、２種類の主格主語を有する肥筑方言を対象にその解釈を精査し、当該接続詞は救出効果を示す肯定極性項目であり、その作用域決定に統語的な焦点化移動等は関与していないことを明らかにした。さらに、フリジア語と肥筑方言の比較等、方言データをもとに焦点化と削除の関係について検討し、統語的に焦点化素性が他の（形式）素性を活性化することを明らかにした。また、この種の素性活性化は「が」格目的語の認可にも見られることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
言語と思考の関係を解明する手掛かりとして、自然言語の論理接続詞の特性を明らかにすることは有意義である。よって本課題において、日本語の選言接続詞の特性（救出効果）を明らかにしたことは、言語と思考の関係を明らかにする上で重要な貢献になる。また、選言接続詞の作用域がその意味的な性質によって決定されるのであれば、他の量化詞等についても更なる検討が必要であることを意味する。
　さらに、統語構造構築の段階で素性の複合体によって統語操作が牽引されうることを示したことは、特にAgree操作における（形式）素性の役割を解明する手掛かりとなり、統語理論の発展に大きく貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：The current study clarified the syntactic and semantic properties of logical connectives, in particular disjunction in Japanese. We reported that Japanese disjunction exhibits rescuing effects, based on data from the Kumamoto Hichiku dialect, which allows two types of nominative subject: one in vP and the other in TP. This finding shows that Japanese disjunction is a positive polarity item, and no syntactic movement plays any crucial role in determining its scope domain. We also investigated the function of the Focus feature in Agree operation, examining the relationship between focus and ellipsis, and showed that the complex of the Focus feature and the (genitive) Case feature activates the Ellipsis feature. Likewise, the complex of the Focus feature and the potential suffix licenses nominative object.

研究分野：統語論

キーワード：選言接続詞　肥筑方言　救出効果　NP削除　形式素性　主格目的語　肯定極性項目

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまで論理接続詞 (logical connective) に関する研究は、量化詞全般の作用域に関する研究に大きく貢献してきた。次の 2 文の解釈の違いに注目してもらいたい。

(1) a. John did not buy a book or a pen. not > or, *or > not
b. ジョンは本かペンを買わなかった. *not > or, or > not

英語とは異なり、日本語では「か」が否定辞よりも広い作用域をとる。
Goro (2007) は「か」を肯定極性項目 (positive polarity item) と分析し、この日英語の差異は (2) にあるパラメータから導き出せるものと考えた。

(2) 論理接続詞は 言語によって[+/－ 肯定極性項目] に分けられる.

否定辞よりも広い作用域をとることが肯定極性項目の特徴であるため、日本語の「か」が [+ 肯定極性項目]、英語の ‘or’ が[－ 肯定極性項目]であるならば、(1) の対比は説明できる。
しかしながら、Goro (2007) は、「か」が肯定極性項目であれば示すはずの、(3) に例を挙げた**肯定極性項目に関する救出効果 (rescuing effect) が見られない**ことも指摘している。

(3) a. John did not call someone. *not >someone
b. I do not think that John did not call someone. not > **not > someone**

(3b) の *someone* とは異なり、(4) では「か」が否定辞よりも狭い作用域をとることはない。

(4) 私はジョンが本かペンを買わなかったと思わなかった. *not > **not > or**

Shibata (2015) は、この救出効果が見られないことを証拠に Goro (2007) の分析は維持できないと結論付け、(1a) と (1b) の対比について**構造的隣接性の基づく代案**を提唱している。
本研究は、近年の統語論ならびに意味論・語用論の理論的発展を踏まえ、現ミニマリストプログラム (Chomsky 2013, 2015) の枠組みにおいて選言接続詞に関する理論の再構築を行った。

２．研究の目的

本研究は、近年の実験語用論的な理論発展 (Noveck and Reboul 2008, Huang and Snedeker 2009 他) ならびに意味論・語用論に関する理論の精密化（Chierchia, Fox and Spector 2012, Spector 2014 他）を踏まえ、**日本語の論理接続詞の統語的ならびに意味（語用論を含む）的特徴を、方言データをもとに捉え直すこと**を目的とした。最終的に、構造的隣接性に基づく Goro (2007)ならびに Shibata (2015)の分析に対する帰結を求めると同時に比較言語学的な観点から方言データをもとに焦点化の係る統語操作について検討した。

３．研究の方法

(1) 実験語用論的な観点から真偽値判断法を用いて、日本語の選言接続詞における救出効果の有無を明らかにした。実験文は、否定含意の環境を主語のタイプによって構築し、さらに肥筑方言における「が」格主語と「の」格主語の 2 種を採用した。さらの選言接続詞を含む目的語をスクランブリングさせることによって、解釈の違いが生じるか否かも検討した。
(2) 統語分析については、先行研究における焦点化に係る方言データを基本データとして、理論的な予測を母語話者による容認性判定法を用いて検証した。

４．研究成果

本課題の研究成果は以下の通りである。

(1) 「日本語の選言接続詞は救出の効果を示す」

実験１においては、上方含意の環境において選言接続詞を含む目的語がスクランブリングされた場合、救出効果を示す実験文の容認度は、「が」格主語と「の」格主語の間に顕著な差はなく、それぞれ 27.4%、34.5%の容認度であった。実験２において主語を「二人以下の学生」に変更し下方含意の環境を構築し、実験１同様に選言接続詞を含む目的語がスクランブリングした場合、救出効果を示す実験文の容認度はそれぞれ 83.3%、81.7%に上昇した。この下方含意の環境における実験結果は日本語の選言接続詞が救出効果を示すことを意味する。
さらに、下方含意の環境においてスクランブリングが関与しない場合、「が」格主語と「の」格主語の間に、救出効果の有無にかかわらず、顕著な差はないことが分かった。「が」格主語の環境における（選言接続詞＞否定辞）90.0%と（否定辞＞選言接続詞）78.3%、「の」格主語が（選

言接続詞＞否定辞）71.7%と否定辞＞選言接続詞）81.7%であった。この実験結果は、硬直性条件（rigidity condition）(Hoji 1985, Lasnik and Saito 1992)を仮定する限り、統語的な分析には問題となる。Nishioka (2018)によれば、「が」格主語は TP 指定部、「の」格主語は *v*P 指定部に位置し、Goro (2007)を仮定すると選言接続詞を含む目的語はこの２つの間に位置する機能範疇に移動するため、作用域関係としては「が」格主語＞選言接続詞を含む目的語＞「の」格主語の順番になり、それぞれの主語と選言接続詞の間の作用域関係が異なるからである。

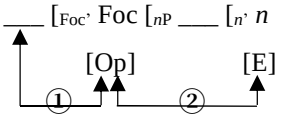
日本語の選言接続詞は肯定極性項目であり、作用域はその特性から導かれる。よって、Goro (2007)、Shibata (2015)等において移動分析が提唱されているが、選言接続詞の作用域決定に関与していないことが明らかになった。

(2) 「素性の複合体が統語操作を牽引する」

Corver and van Koppen (2006)は、フリジア語における NP 削除の可否と屈折語尾の形態の関係を明らかにし、Foc(us)には Op 素性と E(llipsis)素性があり、焦点化された句を FocP 指定部へ牽引することによって E 素性が活性化され、NP が削除されると主張する。屈折語尾を E 素性の具現化した形態と考えるのである。これは、肥筑方言 において焦点化された「が」格名詞句が NP 削除を牽引できないこと (Fukuda 2008)と一見矛盾するように見えるが、本研究ではフリジア語と肥筑方言の違いが 日本語に φ 素性の一致がないことに起因することを明らかにした。Aelbrecht (2010)が主張するように、E 素性の活性化には φ 素性等の一致が必要であるならば、 日本語では Agree を介した NP 削除の認可はできないことになる。しかしながら、これは指定部－主要部の一致に基づく認可 (Saito, Lin and Murasugi 2008)を排除するものではない。

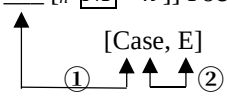
Cover and van Koppen (2006)によれば、フリジア語では、(5)に示すように焦点化された語句が FocP 指定部に移動し、この移動が起こった際に Foc が Agree を介して *n* にある E 素性を活性化する。その結果、NP 削除が認可されるのである。（(5)－(7)における①と②は統語操作の順番を表す。）

(5) $[_{DP}$ D $[_{FocP}$ ___ $[_{Foc'}$ Foc $[_{nP}$ ___ $[_{n'}$ *n* $\boxed{\text{NP}}$]]]]]



フリジア語に対して日本語には φ 素性がないことから、この Agree を介した E 素性の活性化の可能性はないと考えうる。Fukuda (2008)が正しければ、肥筑方言において「が」格名詞句は FocP 指定部に位置するため E 素性を認可することはできないことになる。よって、この E 素性を活性化するためには、いわゆる指定部－主要部の一致を介する方法しか残されていない。(6)に示したように、焦点化されていない「の」格名詞句は *n*P 指定部を占めると考えうるので、*n*P における一致を起こし、NP 削除を認可できるのである。

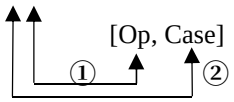
(6) $[_{DP}$ $[_{FocP}$ $[_{nP}$ ___ $[_{n'}$ $\boxed{\text{NP}}$ *n*]] Foc] D]



さらに *n*P 指定部を A 位置と仮定することによって、Saito and Murasugi (1990)、Lin, Murasugi and Saito (2001)等が指摘する、日本語では修飾語句が NP 削除を牽引できないことも説明が可能である。

また、「本を買いに」のような「に句」の場合、「が」格目的語は認可されないと観察されてきた再構築（restructuring）(Miyagawa 1987) が起こり得ない統語環境においても、当該目的語が焦点化されることによって認可されうることを示し、「が」格目的語の認可も「Focus 素性＋可能接辞等が有する素性」の複合体によって行われることを明らかにした。具体的なメカニズムとしては Saito (2012)に従い、主要部が編出（excorporation）する過程で (7)の構造が構築され、「が」格目的語は認可されるのである。

(7) $[_{FocP}$ ___ $[_{Foc'}$ Foc+可能接辞 …]]



単体では活性化されない素性の存在を明らかにしたことに本研究の意義がある。なお、当該理論研究の研究成果については現在、西岡・宮本として出版準備（開拓社）を進めている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Masako Maeda	４．巻 -
２．論文標題 Argument Ellipsis as Topic-Marking and A'-movement in Japanese	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Proceedings of the 13th Generative Linguistics in The Old World in Asia 2022 Online Special	６．最初と最後の頁 170-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kensuke Takita, Masako Maeda and Taichi Nakamura	４．巻 -
２．論文標題 Varieties of Tough-Constructions and FormCopy	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Proceedings of the 13th Generative Linguistics in The Old World in Asia 2022 Online Special	６．最初と最後の頁 255-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masako Maeda	４．巻 40
２．論文標題 Ga/No-Nominative Conversion and A- and A'-movement	５．発行年 2023年
３．雑誌名 JELS	６．最初と最後の頁 147-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前田雅子	４．巻 3
２．論文標題 日本語における相対的最小性の欠如について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	６．最初と最後の頁 315-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoichi Miyamoto	4．巻 -
2．論文標題 Disjunction and the Type of Subject in the Kumamoto Dialect: A Pilot Study	5．発行年 2023年
3．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masako Maeda and Hideki Maki	4．巻 -
2．論文標題 Where the Nagasaki Japanese Stands	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Essays on Case	6．最初と最後の頁 73-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masako Maeda	4．巻 1
2．論文標題 The vP Cartography in Standard and Nagasaki Japanese	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西南学院大学外国語学部論集	6．最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masako Maeda	4．巻 -
2．論文標題 Honorification in Standard/Nagasaki Japanese and Anti-Homophony	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Proceedings of the 22nd Seoul International Conference on Generative Grammar	6．最初と最後の頁 174-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masako Maeda	4．巻 22
2．論文標題 Argument Ellipsis and Scope Economy in Japanese	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Syntax	6．最初と最後の頁 419-437
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/synt.12186	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前田雅子	4．巻 60
2．論文標題 介在効果に関する音韻分析ー東京方言と福岡方言の対照分析ー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 西南学院大学 英語英文学論集	6．最初と最後の頁 33-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nobuaki Nishioka	4．巻 14
2．論文標題 Discourse-configurationality and the Scope of Negation	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Nanzan Linguistics	6．最初と最後の頁 25-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nobuaki Nishioka	4．巻 -
2．論文標題 On the Scope of Negation and the Position of the Subject in Japanese	5．発行年 2018年
3．雑誌名 The Syntax-Phonology Interface in Generative Grammar: Proceedings of the 20th Seoul International Conference on Generative Grammar	6．最初と最後の頁 305-319
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masako Maeda	4．巻 60
2．論文標題 [Review] B. Andreas (2017). Symmetry, Shared Labels and Movement in Syntax	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Studies in English Literature	6．最初と最後の頁 107-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yosuke Sato and Masako Maeda	4．巻 37
2．論文標題 Particle Stranding Ellipsis Involves PF-Deletion	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Natural Language and Linguistic Theory	6．最初と最後の頁 357-388
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yosuke Sato and Masako Maeda	4．巻 3
2．論文標題 Spelling-Out Inverse Scope in Japanese: Intonation and Scope-Prosody Correspondence	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Phonological Externalization	6．最初と最後の頁 25-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Ayaka Tamura, Masako Maeda, Koichi Otaki and Yoichi Miyamoto
2．発表標題 On the Scope of Disjunction in Kumamoto Dialect
3．学会等名 The 3rd International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 Masako Maeda
２．発表標題 A Movement Approach to Nominative Object Constructions in Japanese
３．学会等名 The 4th Joint Meeting of Neo-Grammar Circle and the Fukuoka Linguistic Circle
４．発表年 2021年

１．発表者名 前田雅子
２．発表標題 肥筑方言のノ格の生起条件に付いて
３．学会等名 Fukuoka Linguistic Circle 第三回例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Masako Maeda, Taichi Nakamura and Kensuke Takita
２．発表標題 Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 28（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 前田雅子
２．発表標題 長崎方言の敬語形態素とAnti-Homophony
３．学会等名 言語変化・変異研究ユニット第6回ワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 Masako Maeda
２．発表標題 Honorification in Standard/Nagasaki Japanese and Anti-Homophony
３．学会等名 The 22nd Seoul International Conference on Generative Grammar（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 前田雅子
２．発表標題 長崎方言の敬語形態素とvPカートグラフィー
３．学会等名 北海道大学 メディアコミュニケーション研究院 言語学ワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 前田雅子
２．発表標題 介在効果の再考
３．学会等名 日本英語学会第37回大会ワークショップ「言語の多様性再考：外在化の観点から」
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀧田健介，前田雅子
２．発表標題 日英語の統語的アマルガムについて
３．学会等名 日本英文学会第91回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoichi Miyamoto
２．発表標題 Nominal-internal Distributive Interpretation in Fragment Answers
３．学会等名 Generative Perspectives on the Syntax and Acquisition of Japanese
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nobuaki Nishioka
２．発表標題 On the Scope of Negation and the Position of the Subject in Japanese
３．学会等名 The 20th Seoul International Conference on Generative Grammar（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田雅子
２．発表標題 日本語の疑問文断片
３．学会等名 日本英語学会第36回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masako Maeda
２．発表標題 Feature-relativized Criterial Freezing: Evidence from Overt-Covert Movement Asymmetries and Multi-Criterial Movement
３．学会等名 Workshop on Cross-linguistic Variation in the Left Periphery at the Syntax-Discourse Interface（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 遠藤喜雄、前田雅子
２．発表標題 副詞節に見る従属度の新たなタイポロジー
３．学会等名 関西言語学会第43回大会シンポジウム「文構造の核と周辺ー従属節のタイポロジー」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yosuke Sato and Masako Maeda
２．発表標題 On Syntactic Head Movement in Japanese and Its Interpretive Consequences: A New Perspective from Verb-Echo Answers and Negative Scope Reversal
３．学会等名 The 41th GLOW Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 遠藤喜雄、前田雅子、加賀 信広、西岡 宣明、野村 益寛、岡崎 正男、岡田 禎之、田中 智之	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 260
３．書名 カートグラフィー	

１．著者名 澤田　治、岸本秀樹、今仁生美、片岡喜代子、西岡宣明、渡辺明、中西公子、平岩健、Yasutada Sudo、吉本靖、郷路拓也、大島デイヴィッド義和、井戸美里、衣畑智秀	４．発行年 2019年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 400
３．書名 極性表現の構造・意味・機能	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	前田　雅子 (Maeda Masako) (00708571)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	大滝　宏一 (Otaki Koichi) (50616042)	中京大学・国際学部・准教授 (33908)	
研究分担者	西岡　宣明 (Nishioka Nobuaki) (80198431)	九州大学・人文科学研究院・教授 (17102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Leibniz-Centre General Linguistics			